

研究発表

トラウマティックな歴史性をもつ他者への「呼びかけ」に対し、わたしたちが 負うことの可能な『応答／責任』とは

五十嵐 舞（一橋大学大学院社会学研究科修士課程）

他者へ自己の痛みについて語る／語られるとき、その「痛み」が理解されずに否定される／するということがある。本研究は、「痛み」の承認の恣意性に注目し、「治療」の対象となっている PTSD と、そのようには名付けられていない「痛み」を一度、同じ線の上に連続するものとして捉え直し、こうした他者の痛みを否定する構造の分析及び、そういった問題（本研究では「痛み」の非承認を暴力的なこととして捉える。）への倫理的な態度について主にジュディス・バトラーの思想を手掛かりに模索する試みである。

研究方法は、自身も第二次大戦への従軍経験から PTSD のような症状に苦しめられた作家、J.D.サリンジャーによる、除隊した兵士「私／X」の PTSD 体験を描いた短編” For Esmé - with love and squalor” と、従軍体験はないものの、精神的な大きなショックを抱える少年ホールデン・コールフィールドを主人公にした *The Catcher in the Rye* を分析の対象とし、両者の表象の共通性から、PTSD と名付けられる痛みと、そうではない痛みの非承認の構造の連続性を見出し、そしてジュディス・バトラーの「悲嘆可能性」概念を中心に、トラウマ研究との参照を通じて倫理的態度の考察をする。最初に、ある主体の、ある「痛み」が「痛み」として承認されないその構造について分析だが、まず、バトラーが『戦争の枠組』において論じる「悲嘆可能性」概念をめぐり、「生きた生」と「亡霊のような生」という視点から両作品の表象を読み解く。そして「承認可能性」や「理解可能性」「感知」などの点から、既読み解いた表象の構築経緯を明らかにし、同時に両作品において描かれる「救い」の正体の分析から、痛む主体の回復への契機を検討する。そして、以上を踏まえ、ある種の「痛み」を認めない構造、枠組にどのように抵抗していくか、またわたしたちはそのような構造の中でいかにして倫理的主体でありうるかということを考えていく。まず、バトラーの「パフォーマティヴィティ」概念の観点から、痛む主体自体が持ち得る枠組への抵抗の可能性とその限界を模索する。そして、バトラーの「生のあやうさ」を基礎とした倫理的態度の示唆や、「被傷性」と中傷発話に関する議論を、臨床をもとにしたトラウマ研究などをつなげ、痛みの経験の記憶から回復するということと、わたしたちが持ち得る／持つべき「応答／責任」について模索していく。

結論としては、端的には、「生のあやうさ」ゆえに、既に「痛み」の承認をめぐる構造に巻き込まれているわたしたちは、痛む主体へそれがどのように痛むのか問いかけてゆくと同時に、「聴くに値するとされる発話」や、自明視されている情動働きの「枠組」を問い直すことを通して、痛む主体が「痛み」を語れることを可能にしていくような場を創出していくということである。